

2023 年度年次報告書

文理融合による人と社会の変革基盤技術の共創

2022 年度採択研究代表者

石川 翔吾

静岡大学 学術院情報学領域
講師

Well-being 最大化のための個性適応型目標創生

研究成果の概要

本研究では、認知症ケアという重要な社会的課題において、①主観的・客観的個性表現モデルの構築という情報科学的な研究とともに、②Well-being 最大化に向けたパーソナライズされた目標の創生に関するシミュレーション技術を開発することでケア DX の実現を目指している。

R5 年度は、12 施設との協力関係を構築し、ケアプラン、アセスメント、ケア実施記録に関するデータの解析を進めた。その結果、良い施設であると評価されている施設は、ケアプランとケア実施記録の連動性が高いことが明らかとなった。また、ケアマネと連携しケアプランの質を評価した結果、良い施設においては Well-being に関連するキーワードが使われており、高齢者のナラティブを手がかりに作成されていることがわかった。これらの検討を踏まえ、ケアプランや実施記録の連動性を高め、記録情報を中核としたケア DX を推進するために、LLM を活用した記録情報の ICF (国際生活機能分類)コード化の仕組みや、ナラティブ情報の sentiment 分析方法、ナレッジグラフによるケアプラン評価の仕組みを開発した。次年度は、これらの仕組みをケア現場に実装し、本システムの有効性評価の検証を進める。

記録の質を高めるためには、ケアの質そのものも向上させていく必要がある。そこで、認知症のさまざまな認知的感覚について体験するためのメタバースを活用した PX 体験プラットフォームを構築し、実証評価研究を実施した。その結果、ケア従事者に対しては、感情的・認知的共感性の向上に寄与することが明らかとなった。一方、ケアが未経験の人に対しては、共感性が低下することが確認された。すなわち、構築した環境は経験を拡張することに貢献したが、経験の土台がない場合、ネガティブな部分が強調される可能性が示唆された。今後、ケア現場においてはより本環境での体験を検討していくとともに、一般の人に対しては体験方法の工夫を模索していく。